

バイ漁場における貝類の複合生産技術（抄録）

吉尾二郎・石田健次・日野裕介

これまで、イタヤガイの効率的採苗技術の確立をめざし、各種採苗方法の検討を行ってきた。そして、底層式採苗方法が採苗効率に優れることを確認した。今年度は前年度に引き続き、底層式採苗方法による採苗試験を沿岸から沖合にかけて実施し、浮遊幼生分布密度調査で得られる結果と比較しようとした。また、稚貝付着経年比較のため垂下式採苗試験を行った。

バイについては、沿岸の採苗地点がバイ漁場として利用されていることから、そこでのバイ漁獲量を調査した。

詳細は「昭和62年度マリンランシング計画プログレスレポート」に報告されているので、ここでは結果の概要について述べる。

結 果 の 概 要

1. イタヤガイの付着状況

殻長2mm以下の稚貝の出現状況から、今年の付着盛期は1～2月と推察された。

2. イタヤガイ浮遊幼生の分布密度

各点の幼生分布密度は12月時点で同水準にあったが、その後は沖合域ほど高密度で推移した。今年度の分布密度を昨年と比較すると、およそ1/2であった。

3. イタヤガイの採苗状況

St. Aの垂下式採苗方法と底層式採苗方法を比較すると、底層式が垂下式より優れることが確認された。各点の底層式採苗の比較では、St. C、Dで他の地点の1.5倍以上の採苗成績が得られた。

4. 育成試験

垂下式の稚貝育成では、連結した籠の上段の個体の成長が極めて悪く、上段ほどストレス（振動）が大きいと考えられた。

5. 採苗施設設置海域におけるバイ漁獲量

当域でのバイ漁業従事者は、恵曇漁協所属の1名のみで、年間162kg程度しか漁獲していないことがわかった。